電子処方箋の運用と課題：医療DXの基盤としての意義と展望

SCORE 現在 30点 » 5年後 60点

愛媛大学医学部附属病院 薬剤部 | 川上幸伸

2023年に全国運用が開始された電子処方箋は、医療DXを象徴する取り組みである。紙処方箋に代わることで安全性・効率性・利便性の向上が期待される一方、現場では紙処方箋と電子処方箋の併存による二重管理や患者利用格差、システム障害への対応などの課題も顕在化している。本稿では電子処方箋の意義と現状を整理し、課題と展望について解説する。

The nationwide rollout of Japan's electronic prescription system in 2023 marked a major milestone in healthcare digital transformation. By replacing paper-based prescriptions, e-prescriptions promise enhanced safety, efficiency, and patient convenience. However, challenges such as dual management with paper prescriptions, disparities in patient access, and contingency handling during system failures remain. This article reviews the significance and current status of e-prescriptions, discusses operational challenges including disaster preparedness, and considers the outlook for the next five years, highlighting their potential as a fundamental healthcare information infrastructure.

はじめに

医療におけるデジタルトランスフォーメーション（医療DX）は、電子カルテや画像診断機器の普及を通じて、近年著しく進展している。こうした変革は診断や治療にとどまらず、薬物療法の領域にも及んでいる。その代表例が2023年1月から全国で本格運用が開始された電子処方箋である[1)]。

従来の紙処方箋では、患者が医療機関で処方箋を受け取り、薬局に持参することによって処方情報が伝達されていた。直感的で分かりやすい仕組みである一方、紙媒体には複数の制約があった。第一に、紛失や破損のリスクである。紙処方箋は物理的に管理する必要があり、患者が紛失あるいは破損すれば再発行に伴い患者と医療従事者双方に負担が生じる。第二に、薬歴情報の分断である。複数の医療機関を受診する患者が増える中、それぞれの医療機関で発行された処方情報が統合されることはなく、患者の全体像を把握することが難しく重複投薬や薬物相互作用のリスクを招いていた。

高齢化が進行する日本社会では、こうした問題はさらに顕著となっている。多疾患併存の高齢患者は複数の診療科・施設を受診し、複数の薬を処方されることが一般的である。紙処方箋の仕組みだけでは患者の薬物療法を一元的に把握することが困難であり、従来から利用されてきたお薬手帳は補完的な役割を果たしてきたものの、お薬手帳の持参忘れや紛失、複数冊に分かれた際の情報の分断といった実務上の課題から、重複投薬や薬物相互作用を防ぐ仕組みには限界があった。このような背景から、電子処方箋の導入は必然的な流れとして位置づけられる。

電子処方箋は、患者が処方情報を紙で持ち運ぶのではなく、処方情報を中央の